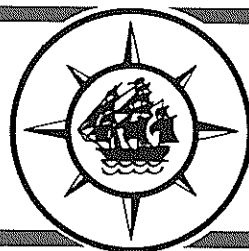


Operation Raleigh News

Operation
Raleigh

DENSO

No.35

昭和62年(1987)9月10日(休)
毎月1回発行●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーミビル502号
電話 東京(03)544-7413

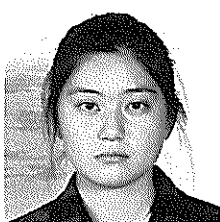
●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装株式会社のご協力で作られたものです。

パキスタン・フェイズへ6青年出発

カラコルム山脈で奉仕や科学調査



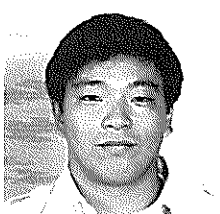
村上由香里さん



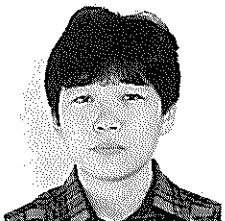
志村秋子さん



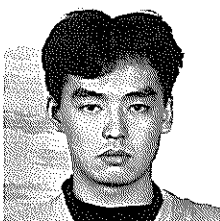
熊谷正紀君



菅原剛志君



高橋央美さん



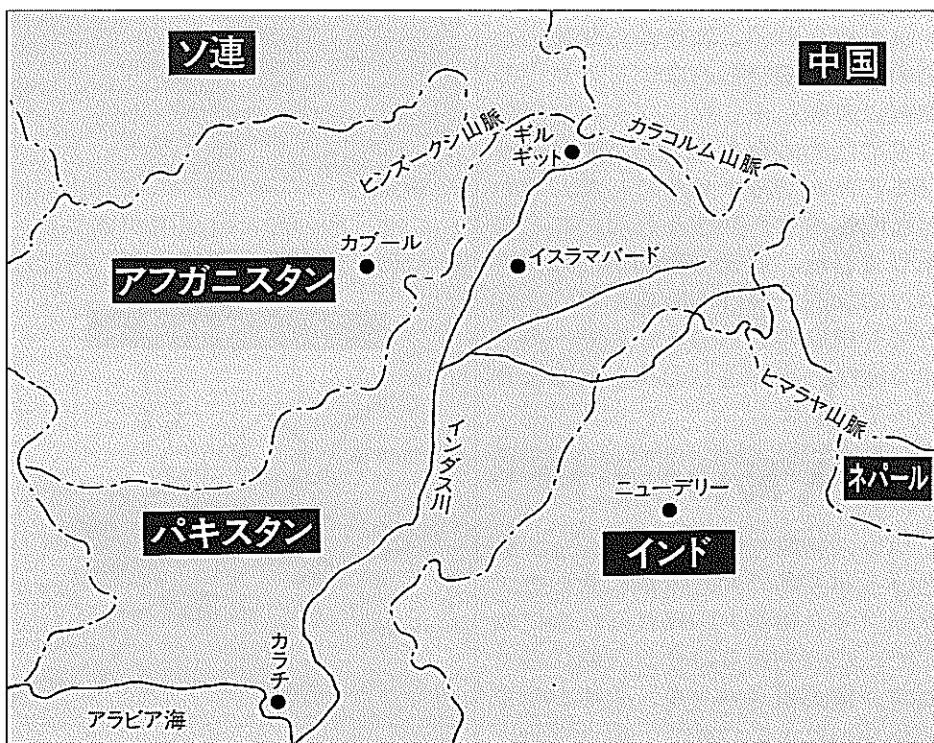
山下彦二君

日本からパキスタン・フェイズに参加する代表青年6名(村上由香里さん、志村秋子さん、熊谷正紀君、菅原剛志君、高橋央美さん、山下彦二君)は9月7日正午発のパキスタン航空で成田を立ちましたが、途中エンジントラブルのために北京で足止めされ、翌8日18時30分に22時間遅れでイスラマバード空港に到着しました。パキスタンでは北方地域を中心に次のような奉仕・科学活動が予定されています。

■奉仕：パキスタンの北部地域は高山地帯で、人口はあちこちに分散している過疎地域です。そのために開発は遅れ、政府はここ2~3年、こ

の地域の資源開発と地域社会の生活上に力を入れています。そんななかで北部地域のアガ・カーン農業サポートプログラムは、地域農業との関係をうまく調整しながら開発事業を進めています。オペレーション・ローリーのベンチャーたちもここで社会奉仕プロジェクトに取り組む人々とともに活動することになるでしょう。現段階では活動の詳細は未定ですが、キャンプはギルギットからカラコルム・ハイウェイで112kmのところにおかれ、42名のベンチャーは3グループに分れて、ハンザの2つの村の間の1.5km道路の建設や、小学校建設などの奉仕プロジェクトを行なう予定です。

■科学：カラコルム山脈でのORベンチャーの科学プロジェクトに対してパキスタン科学財団が協力してくれることになりました。パキスタン北方地域は、ヒマラヤ、カラコルム、ヒンズークシといった大きな山脈があり、ここで動植物学・地質学、水質学などの調査および地図づくりに取り組みます。動物学では水中生物・脊椎動物・昆虫調査、植物学では野生植物・生態学・生物学調査、地質学では地層調査・岩石採集、川や湖の沈殿物採集、分布図づくりなどが計画されています。なお、科学キャンプはギルギットから148kmのカラコルム・ハイウェイのパスウに建設される予定です。



帆船号 インド洋を横断

日本人ベンチャラー森田君、航海記を寄せる

ダーウィンからゼブ号に乗船し、インド洋を航海した森田昌之君から8月29日付で次のような航海記が届けられました。

順風満帆の航海

私たちの航海は今のところ順調に進んでいます。6月25日にダーウィンに集まったベンチャラーたちは、7月7日にクリスマス島に向いました。到着は18日。そこからココス諸島に向け出航したのが23日で、27日着。さらにチャゴス諸島に向け8月5日にココスを出航。現在ココスから600マイル西のインド洋上を航海中です。

ここまでの航海で、最も印象的だったのはクリスマス島でした。インドネシアに近いのですが、ここにしか生息しない動植物が多数見られました。鳥類ではアカアシカツオドリ(亜熱帯種)、クリスマスネッタイチョウ、クリスマスグンカンドリ、モモグロカツオドリなど。絶滅の恐れのある種も含まれています。私はここで3日間、まだ巣も見つからないために習性その他の詳しいデータが得られず、政府から保護のための援助が受けられないフクロウの調査に参加しました。フクロウは夜行性のため調査も夜間で、姿は全く見ることができませんでした。それどころか声すら聞きとれないこともありました。地元の教師がこのフクロウの調査を続けているそうですがとても根気のいる調査なので一刻も早く援助の手がさしのべられるよう祈っています。

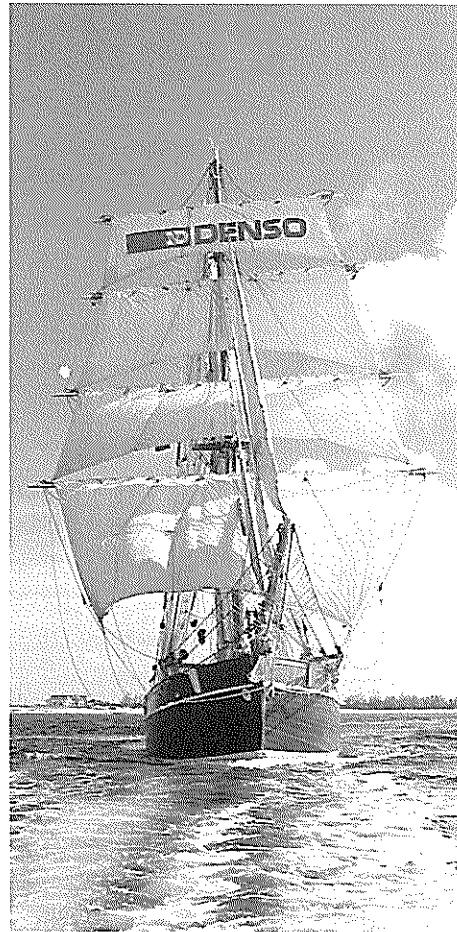
無人島にも上陸

ココス諸島では、ピレクション島という無人島の沖に投錨しました。クリスマス島が火山島だったのに対して、このあたりはサンゴ礁の島々です。標高数メートル、全体がヤシにおおわれたこの島で、思う存分ヤ

シの実を食べ、ジュースを飲みました。

海鳥が多数繁殖

8月1日、国立公園のレンジャーに連れられてノース・キーリングという島へ動植物調査に行きました。



ここは、他の島とは植生が異なり、島の約半分が広葉樹でした。そこに

インド洋航路



シロアジサシ、アカアシカツオドリなどが営巣しており、クロアジサシ、コグンカンドリもかなりの数が見られました。他の島ではこういった海鳥だけでなく、陸の鳥もほとんど見られないのに、なぜここだけに多数繁殖しているのか不思議でした。

嵐の中での苦労

ココスに着くまではずっと晴天続きだったのが、ココスでは1日おきに雨が降る、不安定な天気でした。さらにココスを出てからは何度か嵐にみまわれ、暴風雨の中での作業は非常に困難でした。日常生活でも洗たく物は乾かない、食器はひっくり返る、お茶をテーブルに注ぐといった、陸上では考えられないような日々を過ごしました。8月17~22日はソロモン諸島のある無人島で休養をとりました。汚れた体をデッキで洗い、夜の海に飛び込むと波間に発光プランクトンがキラキラ光り、一日の疲れも一瞬にしてとれる思いでした。しかし次の日の夜、2匹のサメを釣り上げたことで、泳ぐ気はなくなりました。そのサメは翌日のランチ・メニューに登場しました。

航海もあとわずか

航海は順調で明日(30日)にはほぼ予定どおりスケジュールに到着できるでしょう。私たちのインド洋横断の航海もあとわずかです。幕を閉じようとしています。他のベンチャラーも少しでも航海に関する知識を蓄えようと、残された時間を勉強に使っています。そのうちの数人はリーダーのかわりに指令を出すことができるほどです。私はそれには、はるかに及ばないものの、努力して得たさまざまな知識や経験は、何ものにも代えがたいのだという満足感で一杯です。ただし怠け者の自分に対する反省の気持ちも多々ありますが…。

最後に、私にこんな素晴らしい機会を与えてくださった皆さんに感謝の気持ちで一杯です。日本代表というにはあまりに力不足の私でしたが…。航海はあとわずかですが、これからはこの貴重な体験を次の世代に伝えていくという、大切な私の仕事が始まります。今後より一層の努力を続けていきたいと思っています。

●マレーシア・フェイズ

洞窟探検やジャングル道づくり

3地域に分かれて活動

【マレーシア】 100名のベンチャラーたちは32名のマレーシア人ベンチャラーと合流し、7月8日クアラルンプールでのユース・スポーツ大臣主催レセプションに参加しました。

■サバ：民族舞踊による歓迎のあとベンチャラーたちはジャングル・トレーニングを経験、昆虫・植物調査やキナバル山登頂プロジェクトなどに分かれて活動を開始しました。

他のプロジェクトから南東に100マイルほど離れたダナム平原でのジャングル道作りのプロジェクトは大変ハードな内容ですが、美しい景観のなかで順調に進んでいます。またタンブナンの奉仕活動も、医療や農業教育などさまざまな分野で成果をあげています。



■サラワク：ランビーアとニアにキャンプが建設されました。このプロジェクトに参加している飯島京太君はORJCに次のようなハガキを、8月11日付で送ってきました。

サラワク州ランビーアでの第一のプロジェクトも8月5日で終り、いまサバー州のタンブナンという山村にいます。ランビーアではジャングルの中に監視塔を建てる作業に参加しました。タンブナンでは集会所建設、農業指導、公衆衛生指導を行なっています。言葉のハンデには困っていますが、病気ひとつせず毎日を楽しんでいます。

ニアで予定されていた橋建設のプロジェクトは残念ながら中止となりました。代りに大洞窟の内部に板を渡してその奥深くを探検するプロジェクトが行なわれています。

■ペニンスラ：ベンチャラーたちは海中生物調査に参加。また別のグループは非常に困難なグナン・タハンの登山に挑戦しています。このグループは登山後、考古学発掘調査を予定しています。

SWR号ハルで歓迎式

ORの旗艦として世界一周航海を終えた科学調査船SWR号は、1987年6月30日母港である英国ハルに帰還しました。ハル港では盛大な歓迎セレモニーが行なわれ、グローセスター公爵、ハンパーサイド州長官、ハル市長ら、OR遠征を支えた多数の人々がSWR号の帰港を祝福しました。SWR号は3年7ヵ月間、43,000マイルの航海をしたこととなります。



▲停泊中のSWR号(チリ・プエルトモント)

●インドネシア・フェイズ

科学・奉仕・冒険に全力チャレンジ

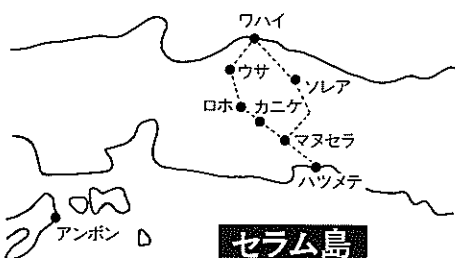
セラム島を主舞台に活躍

【インドネシア】75名のベンチャラーたちは7月10日ジャカルタに到着し、スカウトキャンプでトレーニングを受けました。7月15日にはフェリーでスラバヤ、ウジュンパンダン経由、セラム島に向かいました。主な活動内容は次の通り。

■科学：熱帯雨林地帯の植物（シダ類、ラン類）動物（コウモリ、鳥、は虫類、両生類、甲虫類、スズメバチ、小型ほ乳類）の調査。土壌の研究。野ブタの調査など。

■奉仕：学校の修理、農業の手伝い（種子まき、家畜飼育）サトウヤシからの砂糖づくり、伝統工芸、魚の塩づけづくり。

■冒険：ケービングによる洞窟壁画搜索、トレッキング、シュノーケリング、いかだ下り。



文部大臣の激励や伝統民族衣裳を着た少女たちの踊りに見送られてジャカルタを出発したベンチャラーたちは、7月19日フェリーでセラム島の南にあるアンボンに到着。さらに3艇の船に分乗して、セラム島ワハイのベースキャンプ地に向かいました。気候も乾期に入り、インドネシア当局の協力でヘリコプターによる資材運搬もでき、ベースキャンプ設営は順調に進んでいます。ジャングルを整地し、小屋も立派に建てられました。

ソレアのグループはすべて順調に活動を進めており、皆元気いっぱい一生懸命働いています。撮影隊もセラム島でたくさんのよい素材を集めています。第2隊は6日間の予定でロホを経由してカニケまでトレッキング（徒歩旅行）中です。サワイで予定していた冒険プロジェクトは中止され、アンボンでの冒険プロジェクトまでの6週間、ベンチャラーたちは科学調査、奉仕活動に参加する予定です。

日本代表派遣青年のページ

7月からインドネシア・セラム島を中心に活動中の代表派遣青年から近況報告の手紙が届きました。

村人との交流めざし インドネシア語特訓

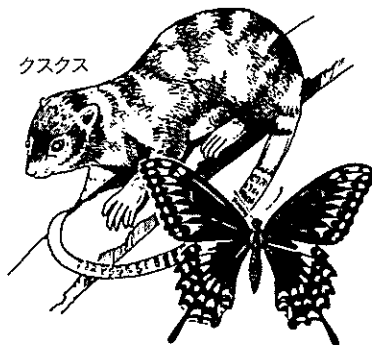
5日間のジャカルタ滞在を経て、スラバヤ経由でセラム島のアンボンへ。そこから3隻の小さな船に分乗してワハイへ向いました。慣れない船旅のためひどく酔ってしまった僕をなぐさめてくれたのは、水平線に沈む夕陽と満天の星たちでした。ここマヌセラではコミュニティ活動として学校建設をすることになり、早速老朽化した校舎の解体、土台作りなどを始めました。また夜にはインドネシア人ベンチャーを先生に、インドネシア語講座が開かれます。これは少しでも言葉を覚えて、村人との交流をはかりたいというみんなの気持ちの表われです。毎日炎天下での作業はかなりハードですが、村の子供たちのピュアな笑顔に心がなごみます。昨日は一緒にサッカーをしたのですが、彼らの上手なこと、上手なこと。僕らは、きりきりまいさせられました。僕は校舎の完成を見とどけるまでこの村に留まりたいのですが、次のグループが到着したら、入れ替わりにサイエンスプログラムが待っているようです。

(8月2日/川村直人)

クスクス・爬虫類など 野生動物調査に参加

日本を出発してはや1ヵ月。私は野生動物の調査に参加。まずはブタ、クスクスなどを捕えるために自分たちでワナを作ったり、村人から狩りを習ったりしました。(結局野ブタを捕えることはできず、出発前の野ブタと森を駆け回りたいという私の夢はかないませんでした。)次はヘビなど爬虫類の調査です。実はヘビは苦手なのです。セラム島に来てから見たものがそれほど大きくなかったので大丈夫と思ったのですが、

話を聞いてみるとここでは10メートルという世界一のヘビが見つかったこともあるそうで、そんな科学的発見が私の目の前には現れないことを祈ります。(8月16日/大塚聡子)



バードウィング・スワロウテール

蝶の科学調査を実施 日本とのハム交信も

私はワハイの港から3時間のところにあるソレアのキャンプで、蝶の科学プロジェクトに参加しました。その内容はイギリス博物館の研究の手伝いで、バードウィング・スワロウテールと呼ばれる大型で極彩色のものなどを採集しました。セラム島は生物種の分類上の境界線であるウォレス線の近くに位置するため、ここでの生物調査は大変意義があるのだそうです。8月のはじめ無線担当スタッフの協力を得て、日本とハム交信することに成功しました。今までアマチュア無線をやっていたこれ程感動したことはなく、思わず声が震えてしまいました。これからもできる限り交信を続けたいと思います。(8月18日/中窪美和)

熱帯のジャングルで セメント袋を運搬

僕のいるインドネシアフェイズは雨続きの天候と厳しい地形のなか、予期せぬトラブルの連続です。学校施設づくりの奉仕活動でリーダーとして活躍していた川村君は、僕と一緒にセメントを取りに山の向う側の村に行く途中で、ヒザに故障を起こし、一時活動をリタイアせざるをえなくなりました。なにしろ山道は全く整備されておらず、一歩まちがえ

ば谷底という場面の連続。こんなコースを実に13時間、互いにはげまして歩き続けました。川村君は足の治療に向かい、後日合流する予定です。訪れたハツメテという村では村長の家にお世話になりました。この人はオペレーション・ローリーに理解があり、僕たちに大変親切で暖かくもてなしてくれました。しかしこの村長の家を出発してすぐにまたトラブルに見舞われました。行きにはすんなり渡れた川が、雨で増水していたのです。僕たちは3~4人で手をつなぎフォーメーションを組んで渡り切りましたが、出発早々いやな予感がしてきました。雨はほぼ1日中降り続きぬかるんだ道が続きました。すっかり水を含んだ靴も、ズブ濡れの荷物も信じられない重さでした。昼食をとって山道にさしかかった時、先頭を歩いていたベンチャーが叫んだ。「道がない!道が流されたんだ。」昨日の雨のためにガケがくずれ、道が谷底に消えていました。左側は底が見えないくらいの谷。右側は鋭く切り立った岩壁。そして僕たちの行く手は土砂と木々に阻まれていました。僕たちは倒木にぶらさがり、やっとの思いでその場を通り抜けましたが、落石で軽いケガをした者もいました。山頂のシェルターでビバーク(野営)。ここは直接ではないまでも、かなりの雨風が吹き込み、寝袋はみな中までビショ濡れでほとんど眠ることができませんでした。翌朝簡単な朝食の後、シェルターを出発しました。急な坂を3時間も登り続けて(熱帯とはいえ雨のジャングルはとても冷えるので休むと立ってられないのです)山頂にたどりついた時の気持ちは忘れられません。ここで僕たちの気持ちはずいぶん明るくなって、インドネシアのベンチャー・ソラのように歌い出す者もいました。ところがやっとなマヌセラまであと4時間という所まで来て、それまで気丈に頑張っていたジャネットがとうとう泣き出してしまいました。僕より体格のいい彼女をなだめながら、最後の力をふりしぼって歩き続けました。結局僕たちが運んだセメントは、たった60キロでしたが、皆の心にしっかりと刻み込まれた旅でした。

(8月25日/内藤泰朗)